

中世韓国語の「傍点」をめぐるいくつかの基本的な課題

福井 玲

東京大学大学院人文社会系研究科

【要旨】 本稿は、中世韓国語で声の高さを示すために用いられた傍点について、それがなぜ付けられていたのか、なぜ、傍点という形式が用いられたのか、15世紀末頃から傍点を付けない文献が現れ始め、17世紀以降は完全に廃止されてしまうのはなぜなのか、また傍点を付けた人々はどのような言語的背景を持っていたのか、という基本的でありながらこれまで論じられてこなかった課題について論じた。また、傍点によって表されるピッチアクセントの変化とその地域差という問題との関わりについてもそのための基礎となる考察を行った*。

キーワード：中世韓国語、ハングル、傍点、アクセント、朝鮮漢字音

1. はじめに

中世韓国語は現代のソウル方言とは異なり、弁別性のあるピッチアクセントをもっていた。これは中世語の文献においてハングルの1字1字に付けられた「傍点」と呼ばれる声の高さを表す記号によって知ることができる。さらに現代の諸方言の中で、慶尚道方言と咸鏡道方言などには弁別的なピッチアクセントが存在し、それらが中世語のアクセントとの間で規則的な対応を見せることから、中世語も含めたこれらの諸方言間の比較を通してアクセントの歴史的な研究を行うことができるのである。それ故、傍点によって知られる中世語のアクセントを解明することは非常に重要であり、実際に河野六郎 (1951/1979a)、金完鎮 (1973)、早田輝洋 (1974/1999)、福井玲 (1985, 2013) などによって、そうした研究が行われてきたが、本稿では、この傍点に関して文献学の立場から、基本的でありながらいまだ解決されていないいくつかの課題を指摘し、その解明をめざすものである。

さて、韓国語史¹において、15世紀に今日ハングル²とよばれる新しい文字体系

* 本稿の一部は2015年1月31日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で行われた朝鮮語アクセント・イントネーション研究会における研究発表「中世韓国語のハングル資料製作者たちの言語的背景」を修正したものに基づいている。また、本稿投稿後、多くの有益な指摘をくださった匿名の査読者の方々に感謝申し上げる。

¹ 韓国語史の時代区分は、おおまかに言って統一新羅の時代が古代語、高麗時代が前期中世語、朝鮮時代に入って16世紀末の倭乱に至るまでの時期が後期中世語、それ以降19世紀に至るまでの時期が近代語と分類されている (李基文 2002)。各時代について資料が存在するが、そのうちもっとも多量で良質の資料が存在するのはハングルが作られて以降の後期中世語である。本稿ではハングル資料を中心に考察するので、本稿でいう「中世語」は実質的には後期中世語をさすことになる。

² 1443年に作られ、当時は主として「諺文」と呼ばれた。「訓民正音」ともよばれるが、この呼称は第一義的にはこの文字の仕組みを解説した本 (『訓民正音 (解例本)』(1446)) の書名を指す (福井玲 (2013: 16-21) 参照)。

が作られたことは画期的な出来事であった。この文字の制定にあたっては今日の言語学から見ても注目される音声学のおよび言語学観察および考察が行われ、さらに、ハングルが作られた15世紀中葉から16世紀末までの間、上で述べたようにハングルで書かれる個々の音節の左傍に、今日「傍点」とよびならわされている点が記入されており、それによって当時の声調ないしピッチアクセントを知ることができる。これは2種類のモンゴル文字や満州文字など類型的に似た言語の表記に用いられる他のアルファベット系文字体系と比較しても例外的ともいえるべき特徴である（図1に、傍点が付けられた15世紀の文献の例を示す）。

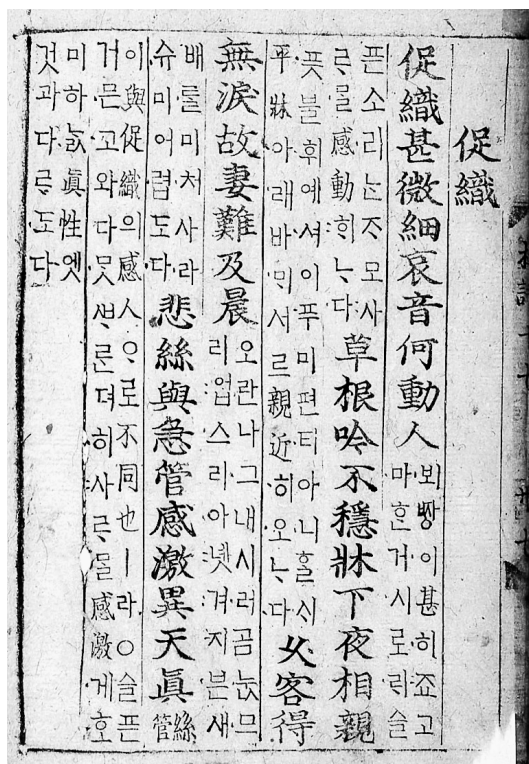


図1 傍点が付けられた15世紀の文献の例（1481年に活字によって印刷刊行された『杜詩諺解』の巻17、37張（東京大学文学部小倉文庫本））

しかし、当然のことながら、この傍点は現代の言語学者がそれを用いて声調ないしアクセントの分析をするために当時の人々が付けておいてくれたものではない。傍点の表示には当時の人々にとっての何らかの目的、あるいは事情があったはずである。ハングル自体の制定目的は、当時の朝鮮では書き言葉としては漢文が用いられていたが、漢字、漢文を知らない「一般民衆は言わんとするところがあっても終

にその情を伸べることができない者が多い」ので、そのような民に、習うのが容易で日常生活で使いやすい文字を提供することにあつた³。しかし、そのような実的な目的のためには、1つ1つの音節に傍点で声の高さを示すのはあまりにも煩雑で、単音節的な声調言語ならばいざしらず、いわゆるアルタイ諸言語や日本語などと類型的に類似している韓国語において傍点が現実的に必要であつたのか、また誰でもそのような表示を行うことができたかについては疑問の余地がある。事実、最近発見された、15世紀末に書かれたと推定される最古のハングルによる手紙には傍点は付けられておらず、手紙のような庶民の日常的なハングルの使用において傍点はそもそも必要なかったことが窺える⁴。

本稿の目的は、この「傍点」をめぐる、(1) そもそもなぜそのような表示がなされたのか、(2) その表示方式はなぜ傍点という形式をとつたのか、(3) 15世紀末から16世紀にかけて傍点の表示を行わない文献が増えていくのはなぜなのか、さらに(4) 傍点の表記を行った人々はどのような言語的な背景をもつた人々だったのか、言い換えればどのような方言話者であつたのか、などの点について考察を行うことにある。これは、傍点とはそもそも何であつたかを当時の実情に即して理解することが、この時代のピッチアクセントの共時的な位置づけとその歴史的な変化、弁別性の喪失、および現代の諸方言のピッチアクセントとの関係などに関して新しい洞察を得るための基礎的作業として必要である考えるからである。なお、論述の都合上、次節では傍点によって知られるアクセント体系の概要と特徴を紹介し、次いで第3節以降で、上の(1)～(4)の課題を順に考察していくことにする。

2. 中世語のピッチアクセント体系の概要と特徴

中世韓国語のハングル資料に見られる傍点とは、ハングルの1字ごとに、字の左側に点を付けて音の高さおよび曲折を表記したもので、次の3種類がある(以下ではこの順にL, H, Rで表す)。

- 平声 無点 低い声を表わす
- 去声 1点 高い声を表わす
- 上声 2点 初めが低く終わりが高い声を表わす

これらの音の高さに関する音声学的な実態は、当時の文献に見られる記述、当時作られた音楽に見られる旋律との対応、現代の方言のアクセントとの対応などを通して確認することができる(福井玲(2013)第6, 7章を参照)。

こうした傍点を用いて、15世紀から16世紀にかけて多くの文献に声の高さの表示が行われていた。特に初期には、語であれ文であれおよそハングルで書かれるほ

³「…愚民有所欲言而終不得伸其情者多矣」(『訓民正音(解例本)』の冒頭の「例義」における世宗の序文)。

⁴ 2011年に韓国の大田市で発掘された『新昌孟氏墓出土諺簡』。Bae Younghwan(2014)により1490年代に書かれたものと推定されている。

とんどの字に傍点が施されており、正書法の一部と言ってもよいほどであった。そのような表記を用いて当時のピッチアクセントを知ることができるが、名詞の場合、表1に示すような体系としてまとめることができる（詳細については福井玲（2013）第6章を参照）。

表1 中世語の名詞のアクセント⁵

1 音節語

	mom「体」		koc「花」		torh (=toorh)「石」	
単独形	mom	H	kos	L	tor	R
+主格	mom-i	HH, HL	koc-i	LH	torh-i	RH, RL
+繫辞	mom-ira	HLH	koc-ira	LHH, LHL	torh-ira	RLH

2 音節語

	kurum「雲」		narah「国」		maZAM「心」		sarAM (=saarAM)「人」	
単独形	kurum	HL, HH	nara	LH	maZAM	LL	sarAM	RL, RH
+主格	kurum-i	HLH	narah-i	LHH, LHL	maZAM-i	LLH	sarAM-i	RLH
+繫辞	kurum-ira	HHLH	narah-ira	LHLH	maZAM-ira	LLHH, sarAM-ira	RHLH	LLHL

この体系は、研究者によっては声調として扱われることもあるが、語の1か所（最初に現れる去声（H）の位置）を指定しておけば、アクセント句の長さに応じてその音調を予測できるので、典型的には日本語のピッチアクセントに近いものである。上声（R）はLとHの複合したものであって、そのLHの後半部のHを最初に現れる去声と見れば、上声以外の場合とまったく同じ振る舞いを見せる。1つのアクセント句内において、最初に現れる去声およびそれ以降の音調は、初期のハンゲル資料ではHH, HLH, HHLH……となるのが一般的だが、同じ文献内でもそうならない場合もあり（例えば上の表に見られる2音節のアクセント句におけるHH

⁵本稿では、次のようにハンゲルをローマ字に転写して示す。

子音字

ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅇ	ㅈ	ㅊ	ㅋ	ㆁ	ㆀ	ㅌ	ㅍ	ㅎ			
k	n	t	r	m	w	p	β	s	z	'y	ŋ	q	c	č ^h	k ^h	t ^h	p ^h	h

(各自並書)

ㄱㄱ	ㄷㄷ	ㅅㅅ	ㅈㅈ	ㅊㅊ	ㅋㅋ
kk	tt	pp	ss	cc	hh

(複子音)

ㅅㅅ	ㅈㅈ	ㅊㅊ	ㅋㅋ	ㅌㅌ	ㅍㅍ	ㅍㅌ	ㅌㅍ	ㅍㅍ	ㅌㅌ
sk	st	sp	pt	ps	pc	pt ^h	psk	pt	psk

母音字

(単母音)

ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅡ	ㅣ	ㅚ	ㅜ	ㅟ	ㅞ	ㅟ	ㅠ
a	e	o	u	i	i	Λ	ja	je	jo	ju					

(重母音1)

(重母音2)

ㅘ	ㅙ	ㅚ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅟ	ㅠ	ㅡ	ㅢ	ㅣ	ㅤ	ㅥ	ㅦ	ㅧ	ㅨ
ai	jai	ei	jei	oi	joi	ui	jui	wa	we	ii	Λi				

～HL, RH～RL), いずれにしても最初に現れる H 以降の部分は非弁別的で、自由変異と見ることができる。

なお、現代韓国語のソウル方言にはピッチの弁別性がないが、慶尚道方言や咸鏡道方言には弁別性が見られ、このうち、中世語の体系は咸鏡道方言のアクセント体系に最も類似している。

3. 傍点はなぜ付けられたのか

これまでの傍点に関する研究は、それが何を表すのか、そしてそれによって表される声調なりアクセントがどのような体系をもっていたか、そして、文献、時代によりどのような違いが見られるかを考察することに集中してきたように思われる(河野六郎(1951/1979a), 金完鎮(1973), 早田輝洋(1974/1999), 福井玲(1985, 2013)など)。筆者も例外ではなく、傍点を単に所与のものとして扱い、それは当時の音声的観察が優れていたことの1つの表れと見て、そもそも傍点がなぜ付けられているのかという問題についてはあまり関心を払ってこなかった。しかし、上でも述べたように、韓国語のような、いわゆるアルタイ諸言語や日本語と同様に多音節語という類型の特徴をもつ言語において、すべての音節に声の高さを表示するというのは例外的な事態である。いうまでもなく、しばしばハンゲルの手本と考えられることのあるパスバ文字を含むモンゴル文字や満州文字など周辺地域のさまざまなアルファベット系の文字体系には声の高さ表示する要素は存在しない。それなのに、なぜ、ハンゲルは創制⁶当初、原則としてすべての音節について傍点を用いて声の高さを表示したのであろうか。傍点は実用性を考えれば必ずしも必要なものではなく、かえって一般の人々にとっては困難なものだったと考えられる。

それにもかかわらず、15～16世紀のハンゲル資料の多くには傍点が付けられていた。特に15世紀には手書きの文献にも傍点を書き入れられたり⁷、あるいは宮中で行われたある法会を漢文で記録した資料の中に⁸、身分が低くて漢字では表記できない固有語による人名がハンゲルで表記され、それにも傍点が付けられるなど、あ

⁶ ハンゲルが初めて作られたことを、しばしば「創製」と表記する場合があるが、「製」の字は当時の文献に即して言えば文章を書く意味で用いられており、ハンゲルというシステムが初めて作られたことを表現するには『訓民正音解例本』の序文にもあるように「創制」とするのが適当である。

⁷ 『上院寺重創勸善文・御牒』(1464, 1465)。ちなみに、この資料は前半の勸善文が信眉(6.1節を参照)、後半の御牒が世祖の親筆であると一般に考えられており、それに応じて前半と後半では筆跡が明らかに異なっている。しかし、世宗大王記念事業会(2010)による訳注本付載の解説(金武峰)では、どちらも別人の手による代筆ではないかとの意見が提出されているが、筆者は親筆の可能性が大きいのではないかと考える。筆跡の違いの他に、後半部、つまり当時の国王世祖の部分のみ間違いを切り抜いて裏から紙を貼り付けて訂正した部分が少ないが、もしこれが臣下の手による代筆ならばこの部分だけ間違いが多いことを説明するのが難しいと考えられるからである。

なお、本論で言及する個々の文献についての詳細、およびその影印資料などに関する情報については福井玲(2013)の第12章を参照されたい。

⁸ 『舍利靈応記』(1449)。

たかもハングルが出てくればそれに傍点を表記するのが正書法の一部であったかのごとき印象を受ける。

さて、傍点がなぜ付けられたかという問題を考えるにあたって、もっとも参考になるのは、漢字音に関する事柄である。河野六郎（1989/1994）でも述べられているように、当時ハングルの創制と表裏一体をなす事業として漢字音の刷新という作業が行われた。これは、より古い時代に入った伝統的な漢字音が、韻書に見られる中国語の古い発音あるいは当時の中国語の実際の発音との間の対応関係において不規則になっていた点を正そうとしたもので、その結果が『東国正韻』（1447）としてまとめられることになったものである。ところで、傍点との関連で注目すべきことは、この新しい漢字音において、個々の漢字の声調も刷新の対象になっていたことである。もっとも、声調を決める作業そのものは、子音・母音の場合とは異なり、単に漢語の伝統的な四声に合わせるだけなので、極めて容易である。問題は、それに際して、伝統的な漢字音の声調が漢語の声調とどのように異なっているかを把握しようとしていた点にある。両者の対応は伊藤智ゆき（1999: 104, 2007: 243）によれば、次のようになる⁹。なお、傍点としての平声、上声、去声を、もとの漢語のそれと区別するため、それぞれL, R, Hで表してある。

漢語	伝統的漢字音
平声	L
上去声 A 群	R
上去声 B 群	H
入声	H

すなわち、漢語の平声は伝統的な朝鮮漢字音の声調において平声に、入声は去声にはほぼ規則的に対応するのに対して、上声と去声の対応は入り混じっているのであるが、『東国正韻』の序文に「字音則上去無別」とあるように当時の人々も明瞭にこのことを把握していた。したがって、声の高さに関する認識に関してまず最初に注意にのぼったのが字音の声調であった可能性が考えられる。

さらに、当時作られたいくつかの文献の中には、漢文の部分で、漢字が声調によって意味が異なる場合に、字の四隅に圏点で声調を表示することが行われていた（このような場合を破音字とよぶ）。例えば、「為」は「なる、する」の意味で使われる場合は平声、「～のために」の意味で使われる場合は去声であったが、この場合には平声の方を基本と捉えて無表示とし、去声の場合にはその位置（字の右上）に圏点を表示したのである（例として図2に『龍飛御天歌』の一部を示す）。この表示方式は中国伝来のものであるが、このような表示が行われたのは、これらの漢文の文章を読む場合に、伝来の字音ではなく、東国正韻で読むべきことを示しており、

⁹ この対応において、入声に関しては、当時もそれが閉鎖音で終わる音であると認識されていたが、音調の面では、それとは別次元で、去声の音調と同じであるとして記録されている。

その中で声調についても気を配って読むべきことを示しているのである（詳しくは福井玲（2013: 88-90）を参照）。なお、朝鮮時代はハングルができる前もできた後も公文書は基本的に漢文で書かれたが、その長い歴史を通してこのような破音字を示す圏点が使われたのはこの時期だけであって、これも東国正韻が作られ、その新しい字音を広めようとしたがゆえの、この時期特有の特殊な現象であったと言える。

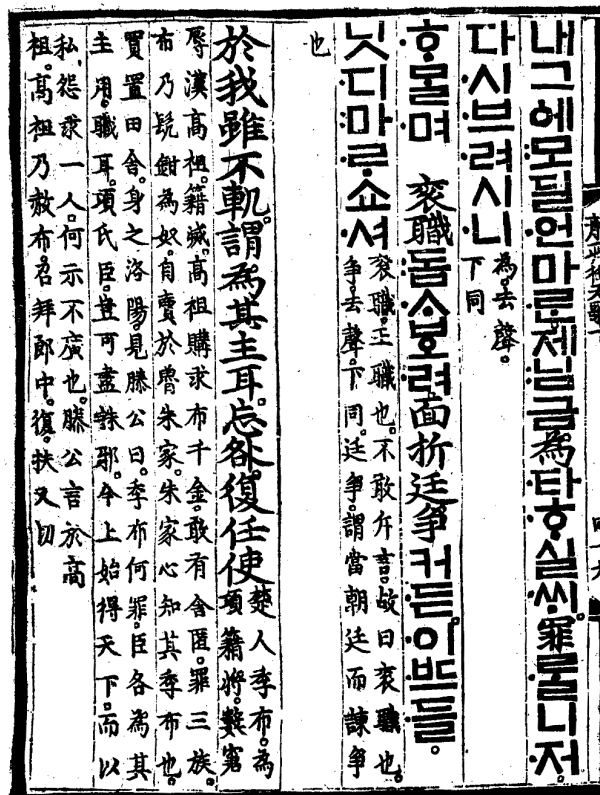


図2 破音字を示す圏点の例（『龍飛御天歌』第121章の一部：京城帝国大学法文学部（1938）『龍飛御天歌』影印本下巻534頁による）

図2に示す『龍飛御天歌』のこの張の例では、1行目と6行目の「為」、3行目の「争」、6行目の「復」に去声点が付けられているのが見える。それに加えて、割注において、2行目に「為」が去声であることを、4行目に「争」が去声であることを注記している。なお、この文献は木版によって刊行されている。

さて、こうした点を念頭において考えてみるならば、そもそも当時の人々が声調を意識して、その発音と表記に留意することになったきっかけは、漢字音の声調を

正しく発音するということから出発していると考えるのがもっとも自然な考え方である。つまり、まず、現実に存在していた伝統的な漢字音の声調を同定した上で、それを東国正韻の声調に直すという作業を意識的に行っていたわけである。おそらくその過程で、字音の声調には平声（低い声）、上声（初めが低く後が高い声）、去声（高い声）という3種類があることを認識し、それをハングルで表記された字音の場合は「傍点」として表現し、さらにそれをハングルで書かれる固有語の語や文にも適用していったものと考えられる。なお、このように考えると、声調の表示になぜすでに漢文では行われていた伝統的な圈点ではなくて、新たに字の左側に点を表示する傍点という方式を新たに作り出したのかが問題となるが、これは次節で扱う。

さて、以上で、傍点が字音の声調の認識とそのため表記方法として始まったと考えられることを示したが、これを固有語に適用していく過程はどのようなものだったであろうか。固有語の単音節語の場合には、音韻論的に字音の平、上、去と同じものであるから同定は易しかったであろう。しかし、それを多音節語に適用するのはたして容易に行なえたであろうか。また、単音節について設定した3つ声調という道具立てがそのために相応しいものであったかどうかについては考慮の余地があろう。その他に、上昇調は上声として認識されていたが、下降調はそれとして同定されていなかった点も問題として提起しうる。しかし、当時、音声的に下降調が存在しなかったとは言えない。なぜなら、今日、弁別的なピッチアクセントをもつ慶尚道でも咸鏡道でも、多くの場合、語末アクセントを持つ語の単独の言い切り形では末尾に下降調が現れるからである。しかし傍点の表記においては、そうした音声的な現象は、仮に存在したとしても捨象され、このアクセント体系にとって音韻論的に有意義と考えられる部分のみを表記したのが傍点による表記だったと考えられる。言い換えれば傍点による表記は純粹な音声学的表記ではなく、当時の人々が音韻論的に整理した結果を示したものであったということを念頭において考察を行う必要があると考える。

4. 傍点はなぜこのような形で付けられたのか

上でもふれたように、声調を表記するための手段として、字の四隅に圈点を表示する伝統的な方法は、漢文において破音字の注記のために行われていた。したがって、単純に考えればこれをそのまま用いて、ハングルで表記される、漢字音や固有語の語形の表記を行ってもよいはずである。しかし、実際にはそのようなことはなく、今日我々が「傍点」と呼びならわす、もっぱら字の左側に点を付ける独特の方式が用いられていた。

その理由については、当時の印刷事情を考慮に入れる必要がある。よく知られているように朝鮮時代には金属活字が作られ、ハングル創制以前より多くの典籍の印刷に木版とならんで活字印刷が行われていた。ハングルが作られてからは、ハングル自体の活字も作られ、漢字の活字とともに使われていたが、当時のハングル資料

の多くが活字を用いていたことから、活字印刷と圏点という方法の親和性が問題となるのである。

これに関して、福井玲（1987）では、当時の活字印刷を用いて刊行された『杜詩諺解』（1481）について、ハングル活字と傍点の関係を考察し、当時のハングル活字において、ハングル本体と傍点は一体になっておらず、別々になっていて、それを組版に際して並べて印刷したことを明らかにしている。普通、活字印刷に際して字と字の間は縦に間隙を置かず、つめて配置していったので、字の四隅に圏点を配置するのは技術的に非常に困難だったと考えられる。これに対して、傍点は、漢字やハングルの活字を縦に配置した後に、その横に縦一列に傍点の活字だけ並べていけばよいので、はるかに容易だったのである。

ところで漢字の破音字について圏点を用いられている文献は『訓民正音解例本』（1446）、『龍飛御天歌』（1447）、『法華経諺解』（1463）の3点が知られているが、この3つはいずれも木版本である。これに対して、同時期のハングル資料の中でも『釈譜詳節』（1447）、『月印千江之曲』（1447）、『東国正韻』（1447）、『楞嚴経諺解』（1461）は活字本であり¹⁰、いずれも圏点是用いられていない。また、木版本で実際に圏点の表示が付けられているものを見ると、字の四隅に字の画に接するか重なるようにして点が打たれているのが分かる（上掲図2参照）。これは木版では可能であるが、活字では不可能である。つまり、傍点という方式は、当時盛んに用いられていた活字印刷を前提として考案された声調表示方法だったと考えられるのである。

5. 傍点はなぜ付けられなくなっていったのか

よく知られているように、傍点は15～16世紀には付けられるのが原則であったが、17世紀以降にはまったく付けられなくなってしまった。これは16世紀末ごろに中世語のアクセント体系が崩壊しはじめ、今日のソウル方言におけるがごとく弁別性が失われていったことが大きな原因と考えられるが、その過程において、主として16世紀の文献では、傍点が付けられてはいても、その内容が変容し、ものによって非常に粗雑にしか付けられないものが現れ、また、当初から傍点を伴わない文献も増えていくことになる。そこでここではまず傍点が付けられていない文献がどのようなものであったかを見ておくことにする。

5.1. どのような文献に傍点が付けられなかったか

まず、福井玲（2013）の第12章に基づき、さらにそこでは挙げられていない資料も若干追加した上で¹¹、15～16世紀のハングル資料全体の中で、傍点による声

¹⁰ ただし、このうちで『楞嚴経諺解』は活字本が1461年に、木版本がその翌年に作られているが、この木版本は活字本を踏襲しているために圏点是用いられていないと考えられる。同様の関係は活字本である『釈譜詳節』および『月印千江之曲』と、これを合編し木版で刊行した『月印釈譜』（1459）の間についても言える。

¹¹ 表中の1480年代の部分には1492年刊と推定される『衿陽雜録』、1490年代に書かれた『新

調表記が見られない文献の数とその割合がどのように表れるかの推移を20年刻みで表にして示すと次の表2のようになる（ただし、ハングル資料の中でも口訣¹²のみのものと楽譜の歌詞は計算から除く）。

表2 中世語ハングル資料における傍点の付けられていない資料の推移

刊行年代	1440	1460	1480	1500	1520	1540	1560	1580	16世紀 刊年不詳	計
ハングル資料総数	9	12	14	12	3	3	13	6 ¹³	3	75
傍点のない資料	0	0	4	1	1	0	8	3	2	19
傍点のない資料の割合	0%	0%	28.6%	8.3%	33.3%	0%	61.5%	50%	60%	25.3%

すなわち、ハングルが創制された15世紀中葉から15世紀の終わり近くまではほぼすべてのハングル資料に傍点が付けられていたが、15世紀末から傍点を伴わない資料が現れ始め、16世紀半ばごろには5割程度に達することがわかる。

次に、傍点による声調表記が見られない文献がどのような種類のものであるかを明らかにするため、具体的に年代順に列挙し、その特徴を記すと次のようになる。

15世紀

- 衿陽雜録（1492）〔基本的に漢文で書かれた農学書で、所々にハングルで表記された植物名が見られる〕
- 伊路波（1492）〔日本語教科書〕
- 神仙太乙紫金丹（1497）〔民間で刊行〕
- 新昌孟氏墓出土諺簡（1490年代）〔地方の任地にいた武官が家族にあてて送った2葉の手紙。ハングルで書かれた手紙として最も古いもの〕

16世紀

- 海東諸国紀 語音翻訳（1501）〔琉球語の資料として著名〕
- 聖観自在求修六字禅定（1560）〔平安道肅川で刊行〕
- 陶山十二曲（1565）〔退溪李滉が残した唯一のハングル資料。木版本〕
- 七大萬法（1569）〔慶尚道豊基喜方寺で刊行〕
- 村家救急方（1571）〔1538年全羅道南原（不伝）、咸鏡道咸興で重刊〕

昌孟氏墓出土諺簡』を追加、1560年代の部分には李滉による『陶山十二曲』（1565）を追加、また16世紀刊年不詳の欄には『順天金氏墓出土諺解』を追加し、さらに『簡易辟瘟方』は1578年重刊本しか存在しないので、1560年代の欄に入れてある。

¹² 口訣とは、漢文を読む際に、助詞や語尾などの助辞を補って読むことを指す。朝鮮時代初期およびそれ以前の時期には、日本の漢文訓読と同じように、読み方の順序を変更する記号なども用いられたが、ハングル資料の時期には、もっぱら漢文自体は上から順読し、間に助辞を補って読む方式のみが用いられた。これらの助辞は、もともと漢字の略体を用いて表記されていたが、ハングルができてからはハングルでも表記されるようになった。こうしたハングル口訣のみが付けられた資料も当然ハングル資料に含まれるが、口訣部分には傍点が付けられないのが原則なので、ここでの計算からは除外する。

¹³ 四書諺解（『論語諺解』、『孟子諺解』、『大学諺解』、『中庸諺解』）はまとめて一点として計算してある。

- 光州千字文 (1575) [全羅道光州で刊行]
 新增類合 (1576) [千字文の次の段階の漢字学習書]
 簡易辟瘟方 (1578) [1525年版(不伝)の重刊本]
 重刊警民編 (1579) [1519年版(不伝)の重刊本]
 石峯千字文 (1583) [名筆として名高い韓石峯の字体をもとに木版で刊行された千字文]
 誠初心学人文・発心修行章・野雲自警序 (1583) [京畿道瑞峯寺で刊行]
 宣祖国文論書 (1593) [国王の宣祖によって書かれた人民への論書]
 順天金氏墓出土諺簡 (16世紀中葉) [順天金氏にあてて母の新川康氏や夫の蔡無易らによって書かれた190枚あまりの手紙]
 百聯抄解 (16世紀中葉) [全羅道長興で金麟厚が編纂した七言古詩]

さて、これらの文献にはいくつかの共通する特徴が見られるが、それらは次の4種類に要約することができる。

- (1) 漢語と陀羅尼以外の外国語を表記したもの
- (2) 語彙資料であること
- (3) 地方あるいは民間で刊行された版であること
- (4) 諺簡であること

まず、15世紀の『伊路波』と16世紀の『海東諸国紀 語音翻訳』はそれぞれ日本語および琉球語をハングルで表記したもので、漢語と陀羅尼以外の外国語を表記した文献にあたる。次に、15世紀の農学書『衿陽雜録』と16世紀の漢字学習書である『千字文』、『新增類合』は語彙資料であり、漢字とともに単語が出てくるのみであって、傍点の必要性は薄かったものと考えられる。なお、漢字学習書においては、漢字の声調も表記される場合があるが、これも『石峯千字文』では、傍点を用いていた『訓蒙字会』などとは異なり、伝統的な、漢字の四隅に圈点を付ける方式になっていて、傍点の必要性はその意味でも低かったと考えられる。次に、民間で刊行されたものとしては、15世紀の『神仙太乙紫金丹』があり、また16世紀には上に示したように多くの本が地方で刊行されていた。その他に15世紀と16世紀にそれぞれ諺簡(ハングルで書かれた手紙)が残されているが、それらには傍点は付けられていない。なお、1593年に書かれた宣祖による『宣祖国文論書』に傍点が付けられていない理由は上の4つのいずれにもあてはまらないが、この時期には国王ですら傍点を付けられなかったのか、あるいは壬辰倭乱に際して民衆によびかけるという実用的な目的のために付けなかったのかははっきりしない。

さて、以上のようにこれらの文献で傍点が付けられていない理由はさまざまであるが、その中でもっとも大きなものは地方刊行の文献ということである。これは地方では、傍点というシステムを理解しそれに従うのが困難であったためと考えられる。

5.2. 地方で刊行された傍点を伴った資料

前節で、地方で刊行された資料には傍点の付けられていないものが多いのを確認したが、次に視点を変えて、地方で刊行されながら傍点が付けられているものにはどのようなものがあるかを、刊行地に関する情報とともに列挙すると次のようになる。

- 長寿経諺解（16世紀前半）〔地方の寺刹と推定されるが、刊行地は不明〕
 父母恩重経諺解（呉応星版 1545, 京畿道長端華蔵寺 1553, 黄海道文化唄葉寺 1564）
 禅家亀鑑諺解（平安道寧辺普賢寺 1569, 全羅道 1610 重刊本）
 全羅道順天松広寺刊行の各種仏教諺解（15世紀刊本の重刊本も含む）

これらの多くは、傍点の付け方が中央で刊行されたものとは非常に異なっており¹⁴、その原因としては、当時のアクセント体系が変化の途上にあった、地方と中央でアクセントに違いがあった、地方では、中央とは違ってアクセントの認識と傍点によるその表記方法がきちんと理解あるいは継承されていなかった、などさまざまな可能性が考えられるが、今のところそれを特定するのは困難である。

ところで、これらの、まがりなりにも傍点を付けられている文献は全羅道で開版されたものが多い。このうち『禅家亀鑑諺解』の1569年版は、平安道で刊行されてはいるが、実際にその諺解を行った金華道人こと義天は全羅道出身と考えられ、その内容にも全羅道方言の影響が指摘されている（金英培（1992）による）。また『父母恩重経諺解』のうち最も古い呉応星版は、刊行地は不明ながら「宝城後学 呉応星謹誌」なる跋文が見られることから全羅道宝城あたりで作られた可能性がある。

これと対比させてみると、慶尚道では傍点を伴った仏教諺解がまったく作られていないのが目につく。前節で挙げたように慶尚道でも16世紀に『七大萬法』という仏教書が慶尚道豊基喜方寺で作られているが、これには傍点は付けられていない。なおこの喜方寺（固有語式の表記で池叱方寺ともいう）という寺では『月印釈譜』など、15世紀の仏教書の復刻版が作られていたので、当然この寺の関係者は傍点に関する知識ももっていたはずであるが、なぜかここで新たに刊行された『七大萬法』には傍点は付けられていないのである。このような地域差を目にすると、当然、その当時、地方によってアクセントが異なっていたかどうかという問題が浮かび上がる。次節でこの問題を取りあげよう。

5.3. アクセントの地域差との関連

現代語では、図3に示すように、慶尚道型、咸鏡道型の多型ピッチアクセント体系、および慶尚道型の一部とそれに隣接する地域に慶尚道型N型アクセント体系、全羅道に曖昧N型アクセント体系が分布し、ソウルを含むその他の地域は弁別性

¹⁴ 福井玲（2000）を参照されたい。

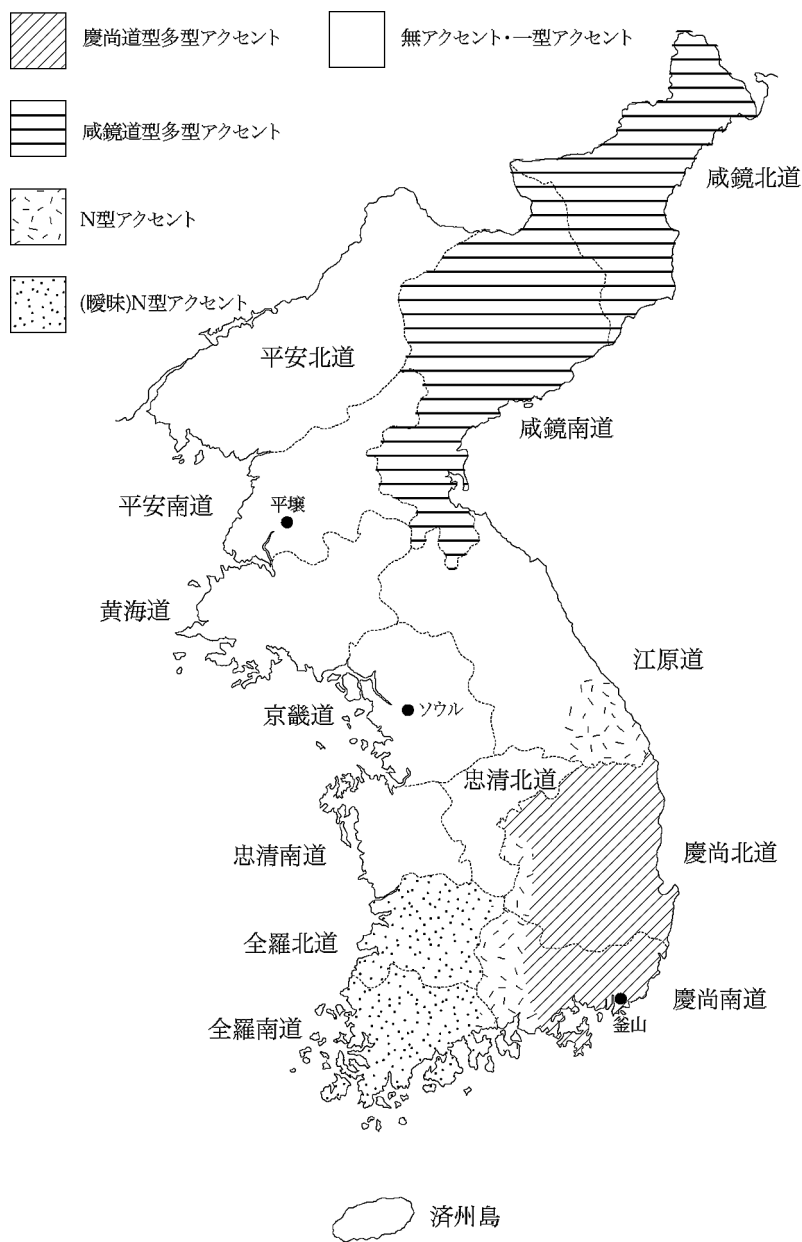


図3 現代のアクセント分布地図 (福井玲 (2013) による)

が失われ、無アクセントまたは1型アクセントが分布している（福井玲（2013）による）。

しかし、15世紀～16世紀にこのようなアクセントに関する方言差が存在したかどうかについてはこれまでほとんど研究が行われていない。韓国語における方言差に関する歴史的な記録は17世紀以降は若干知られているが、ここで問題とする中世語ではほとんど残されていない。したがって現代における方言間の違いと、上で述べたような地域ごとの資料の性質などから推論するほかはないのであるが、その意味で、現代の方言間のアクセント体系の違いは重要である。といっても日本語の場合ほど地域ごとの変種の種類は多くないが、最も重要なのは、弁別性を持つ代表的な方言である咸鏡道と慶尚道において、アクセントの位置の規則的なずれが見られる点である。これをもとにして、Ramsey (1978) は、咸鏡道型のアクセントが1音節前にずれることによって慶尚道型のアクセントが成立したと推定しているが、Uwano (2012: 1437) はそれとは逆に慶尚道型のアクセントが1音節後ろにずれることで咸鏡道型のアクセントが成立したのではないかと考えている。これに対して、福井玲（2013）はこの点については、漢字語において漢字音の声調がそのアクセントにどのような反映されているかを見るとき、中世語および咸鏡道型の方が本来のピッチを維持しているのに対し、慶尚道型は対応が複雑になっていることから、それより1段階変化を経て成立したものではないかと考えている。本稿はこの問題を扱うのが目的ではないので、これ以上は述べないが、中世語における傍点を考えるとき、前節までに述べたような傍点資料の刊行地の地域差を理解するためには、こうした問題も念頭におく必要がある。そして、本稿では最後に、そもそも中世語文献の傍点を付けた人々がどのような言語的背景をもっていたのかという問題を考えてみることにする。

6. 傍点を付けた人々の言語的背景

一般的に考えて、当時、傍点を付けた人々は、個々のハンゲル資料—その多くはいわゆる「諺解」であるが—の撰者ないし諺解者であったと考えられる。ただし、実際には、作業を分担して本文そのものと傍点を別々の人が担当したという場合もありうるが、多くの場合、そのような詳細な記録は残されていないので、傍点を含め、ハンゲルで表記された部分の原稿を誰が書いたかが問題となる。その際、そうした人々がどの地域の方言を話す話者であったを明らかにする必要があり、すでに16世紀のいくつかの資料については方言的影響が指摘されているが、本稿で特に問題とするのは、当時、方言によってアクセントの違いがあったかどうか、またそれによって、傍点の有無、およびその内容にどのような違いが見られたかという点である。筆者はこのことと関連して、仮に15～16世紀において、今日の咸鏡道と慶尚道におけるようなアクセント体系の違いがあったとすれば、当時の中央語以外の方言話者は、はたして傍点というシステムを理解し、使いこなすことができたのだろうか、という問題提起をしたことがある。

ところで、中世語・咸鏡道型の体系と慶尚道型の体系との相対的な関係は明らかになったとしても、慶尚道型のアクセント体系がはたしていつ頃成立したのかは依然として大きな謎である。上で、現在ソウルを中心とするかなり広い地域でアクセントの弁別性が失われており、それは16世紀末に中世語のアクセント体系が崩壊したとして、その間の時間をそれらの地域の広がりには投影すればそれなりに理解できるということを述べたが、慶尚道の場合には、現在、慶尚南北道合わせて全域に慶尚道型のアクセントが分布しており、近年の若年層における標準語の影響を除けば、安定してかなりの期間にわたって維持されてきたものと考えられる。したがって、それはたかだか百年か二百年前に中世語のような体系から変化してできたとは考えにくいものであり、中世語の段階においても現在のような体系をもっていたと想像することは可能である。しかし、そのように考えた場合、問題点となるのは、傍点を伴った中世語のハンゲル資料を製作した人物の中で慶尚道方言の話者がいなかったかどうか、もしいたとして、彼らは自分たちのアクセント体系とは異なる、当時の中央語における傍点の使用法を理解できたであろうかという問題である（福井玲（2013: 205-206））

この問題を探るための手掛かりとして、前節において、地方で刊行された文献で傍点が付けられているものといないものと刊行地との相関を調べ、16世紀に慶尚道で新たに刊行された文献では、傍点を付けられたものがないことを指摘したが、もちろんそれだけのことから当時慶尚道のアクセントが中央語とは異なっていた積極的な証拠とすることはできない。そこで、中世語全般にわたって、それぞれの資料において傍点を含むハンゲル資料の作成者がどの地方の出身であったかを見ていくことにする。

しかし、このような作業は実際に容易ではなく、その要因として次の2つがあげられる。まず、あるハンゲル資料の作成者（多くの場合、諺解者）が誰なのか、正確には分からない場合が少なくない。文献によってさまざまに事情は異なる。例えば『龍飛御天歌』は1445年に鄭麟趾、權踰、安止によって本文が「製進」されたことが分かっているが、このうちハンゲル歌詞を作るのに中心的な役割を果たしたのは誰なのか、またこの文献は表記法から見て世宗が関わったとされるが、その関与のあり方も十分には分かっていない。また、15世紀の刊経都監、16世紀の校正序などから刊行された文献の場合、序跋において撰者、諺解者が明言されている場合を除くと、列銜にあげられた多くの人物のうち、実際に翻訳を行って原稿を書いた人物が誰なのか不明の場合も多い。また、15世紀末の仏書において、諺解者が「僧」などと表現され明言されていない場合もある。16世紀初頭の、金安国による一連の教化書、医学書などの場合も、いくつか問題があるがこれについては後述する。

もう1つの困難さは、ハンゲル資料作成者たちがどのような方言を話していたか、記録がほとんどないからである。言語形成期をどこで過ぎたかが重要な情報にな

るが、それもはっきりしない場合が少なくない。祖先の出身地である本貫は多くの場合明らかにできるが、実際の居住地は異なることが少なくない。例えばハングル創制初期に、漢字音の刷新事業で最も大きな役割を担った高霊君こと申叔舟の本貫は慶尚道の高霊であるが、実際に彼が生まれ育ったのは母方の実家のあった全羅道の羅州である。さらに父親は同じく全羅道の南原出身なので、彼はおそらくは若年時代は全羅道方言の話者だったのではないかと推定できる¹⁵。朝鮮時代の多くの文人の場合、文集が作られていれば、そこに載せられた年譜、行状などが参考になるが、年譜が作られているのは李滉などきわめて著名な人物の場合のみで、たいていは家族関係と生年と各種試験への登第年しかわからないことが多い。また、文集などが作られていない場合もある。したがって、母の生家、父の任地、墓碑銘、墓の所在地、族譜など、あらゆる情報を動員しなければならないが、そう容易な作業ではない。本稿では、これらについて完全な調査を行ったわけではないので、これまでにほぼ判明している範囲で略述し、新たな課題を指摘することにする。

6.1. 15世紀のハングル資料作成者

15世紀にハングル資料を作った人々は、王族、集賢殿の学者たち、仏教諺解に関わった人たちという3つのグループに大きく分けられる。

まず、朝鮮朝を開いた太祖李成桂(1335-1408)は咸鏡道の出身であり、当時の咸鏡道方言を話していたと考えられるが、訓民正音を作った世宗(1397-1450)はその孫の世代にあたり、おそらく当時の中央語(漢城の言語)を話していたのではないかと考えられる。世宗の兄で、円覚経などの翻訳に加わった孝寧大君(1396-1486)も同様である。『積譜詳節』(1447)、『月印積譜』(1459)の編纂、多くの仏書の口訣と諺解に関わった世祖(1417-1468)や文宗(1414-1452)はさらにその次の世代であり、当然中央語を話していたと考えられる。

次に『訓民正音』(1446)作成に関与し、また『龍飛御天歌』(1447)や『東国正韻』(1447)の編纂には集賢殿の多くの学者が関わっていたが、その中でハングル資料作成に関わったと考えられる主だった人々の出身地を列挙していくと、鄭麟趾(1396-1478, 漢城)、申叔舟(1417-1475, 全羅道羅州)、成三問(1418-1456, 忠清道洪川(現在の忠清南道洪城郡))のように京畿道、忠清道、全羅道の出身者が多い。

次に仏教諺解に関わった人物であるが、信眉(俗名 金守省, 1403-1480?)、忠清道黄澗面(現在の忠清北道永同郡)¹⁶、忠清道の法住寺に出家)、金守温(1409-1481, 信眉の弟)、韓繼禧(1423-1482, 忠清道清州)、黄守身(1407-1467, 父の黄喜は開城出身)、学祖(俗名 金振一, 1432-1514?)、慶尚道安東素山里)などで、世祖と協力して仏教諺解で最も重要な役割を果たした信眉をはじめ、ここでもやはり忠清道

¹⁵ 申叔舟の文集『保閑齋集』、安秉禧(2002)などによる。

¹⁶ ただし、Bak, Haejin(2015)によると、信眉の出生地は母方の実家で、外祖父の薫陶を受け、13歳で成均館に入学しているので、漢城付近で過ごした期間が長かったと考えられる。言語的には忠清道と漢城の両方の影響を受けた可能性が考えられる。

出身の人物が多いことが目を引く。唯一、15世紀末の各種仏教諺解に関わったとされる学祖のみが慶尚道の出身であるが、彼のこれらの文献作成における役割は必ずしもはっきりしない。

安秉禧(1978/1992)によれば学祖に関わったと推定されている文献は、『金剛經三家解諺解』(1482),『南明集諺解』(1482),『仏頂心經』(1485),『五大真言』(1485),『靈驗略抄』(1485),『六祖法宝壇經諺解』(1496),『真言勸供・三壇施食文』(1496)の7点にのぼるが、実際に彼が諺解にかかわった記録が残されているものは『金剛經三家解諺解』と『南明集諺解』の2点のみである。しかもこれらも彼が全体を訳したのではなく、世宗の意思により文宗、世祖が翻訳を行い、前者はほぼできていたものについて学祖は校閲を命じられたものであり、後者については、世祖が30余編を訳したが完成にはいたらず、その残りを学祖が訳したものである(両者に所載の韓繼禧,姜希孟跋文による¹⁷)。残りの文献については、『仏頂心經』と『五大真言』には彼の跋文が載っているだけで諺解者についてはふれられていない。また、『靈驗略抄』は『五大真言』に付属するものでこれに準ずると考えられる。『六祖法宝壇經諺解』と『真言勸供・三壇施食文』については後者に所載されている跋文に、仁粹大王大妃が「ある僧」に命じて国語に翻訳させ、前者は三百件、後者は四百件、木字を造って印出させたものであり¹⁸、翻訳者の名前は記録されていない。したがって、彼の役割と言語的背景については今後の検討課題とすべきものとする。

次に、15世紀のその他の文献の製作者をあげてみる。まず『杜詩諺解』(1481)の製作者の中で筆頭に挙げられるのは柳允謙(1420-?)であるが彼は本貫が忠清南道瑞山であるが実際の出身地は不詳である。『救急簡易方諺解』(1489)の撰者の筆頭の尹壕(1424-1496)は、本貫が京畿道坡平で、墓は京畿道漣川郡であり、おそらく京畿道出身と考えられる。次に中世語で唯一の民間で刊行された文献である『神仙太乙紫金丹』(1497)の撰者は李宗準(?-1498)で、彼は慶尚道安東出身であるが、この文献は傍点が付けられていないもっとも古い資料である。

6.2. 16世紀のハンゲル資料作成者

まず、16世紀前半は、数多くの訳学書を作り、当然傍点のシステムも熟知していたと考えられる崔世珍(1468-1542)が最も重要であるが、彼は忠清道槐山の出身である¹⁹。次に重要なのは、数多くの教化書、医学書を刊行した金安国(1478-1543)であるが、彼は京畿道驪州郡注村の出身である。金安国の代表的な著作は『呂氏郷約諺解』、『正俗諺解』などであるが、『二倫行実図』は慶尚道金山(現在の金泉)

¹⁷ 韓繼禧による跋に「慈聖大王大妃…(中略)…命禪徳学祖更校金剛三解訳及続訳南明既訖…」とあることによる。

¹⁸ 跋に「仁粹大王大妃…(中略)…命僧以国語翻訳六祖壇經刊造木字印出三百件…」とあることによる。

¹⁹ 安秉禧(2007)による。

出身の曹伸に作らせたという記録がある²⁰。しかし、両者の表記法、語彙には共通点があり、これらの実際の諺解者が誰なのかについては今後検討の余地がある。それ以外の16世紀前半の重要な文献の製作者としては、『統三綱行実凶』の撰者申用漑(1463-1519)、『翻訳小学』の諺解者金詮(1458-1523)などがあげられるが、申用漑は上で述べた全羅道羅州出身で集賢殿の学者申叔舟の孫であり、金詮は詳細は不明ながら京畿道周辺の出身と考えられる。

16世紀後半の文献には撰者、諺解者不詳のものが少なくない。はっきりしているものをいくつかあげると、『禪家亀鑑』(1569)は平安道で刊行されているが、諺解を行ったのは金華道人こと義天で、金英培(1992)によれば彼は智異山神興寺等で活動し全羅道の出身らしい。また『百聯抄解』(16世紀中葉)の撰者ではないかと推定される金麟厚も全羅道の出身である。

6.3. ハングル資料作成者の地域的特徴

以上見てきた点をまとめると、中世語のハングル資料を作った人物の出身地にはかなりの偏りが見られることが分かる。最も多いのは忠清道、漢城を含む京畿道、全羅道であり、慶尚道出身者は非常に少ない。例外となるのは学祖と、金安国による諺解書作成に関わったとされる曹伸であるが、彼らの果たした役割については不明な点が多く、今後の検討課題として残される。いずれにしても、後に「畿湖派」と呼ばれる京畿道、忠清道、全羅道出身者が多かったことは動かないと考えられる。

なお、中世語のアクセント体系と現代の咸鏡道のアクセント体系が類似していること、太祖李成桂が咸鏡道出身であることから、傍点による中世語のアクセントの記録は全体的に咸鏡道方言の影響下にあったのではないかとの臆説が聞かれることもあるが、以上の結果から見て、当時、京畿道、忠清道、全羅道出身者はほぼ同じアクセント体系をもっていたものと考えられる。これに対して、慶尚道出身者は、上記のように若干の例外はあるものの、当時の中央のアクセント体系とは異なる体系を持っていたと考えることは可能である。ちなみに、16世紀の慶尚道出身の最大の学者は退溪李滉であるが、彼が残した唯一のハングル資料である『陶山十二曲』(1565)には傍点は付けられていない。また、彼は四書五経など儒教書の解釈で著名な人物であったが、彼がこれらの書物の諺解を残さなかったのも、こうした事情と関わりがあるかもしれない。

7. 結論

本論では、中世韓国語ハングル資料の中で重要な位置を占めていた傍点について、次のような考察を行った。ハングルの1字1字に傍点が付けられるようになった理由は、東国正韻において新しく規範的な漢字音の声調を決め、かつそれを実践的に発音できるようにする必要がある、そのための基礎作業として伝統的な漢字音の声

²⁰ 安秉禧(1975, 1976, 1978, 1992)による。

調を音声的に把握して整理し、記録する必要があったことによる。そして固有語の声調・アクセントをそれによって表記したのはその応用であった。したがって、多音節語である固有語の声調・アクセントを言語学的に表記するのに、それが最適の手段であったとは限らないが、同時にかなりの程度までその枠組みで表記することが可能だったとも言える。また、音の高低を表記するのに、漢字の四隅に加える圏点ではなく、傍点という表記手段をとったのは、当時行われていた活字印刷を前提とするものである。

15世紀末から16世紀にかけて、徐々に傍点を伴わないハングル資料が増えていくが、それらは、外国語の表記、内容が語彙的なもの、地方で刊行されたもの、日常的な手紙などが主なものであった。特に手紙類における傍点の不使用は傍点が発用上は不必要であったことの現れと考えられる。他方で、地方で刊行された文献で、傍点のあるなしに地域差がみられることから、当時、地域によってアクセント体系に違いがあった可能性を指摘した。そして当時の文献の製作者の出身地は、京畿道、忠清道、全羅道が多く、当時のアクセント体系はこれらの地域で共通するものであり、慶尚道はそれとは異なっていた可能性があることを指摘した。

参 照 文 献

- 安秉禧 (1975) 呂氏郷約諺解의 原刊本에 대하여. 『學術院論文集』 14. [呂氏郷約諺解の原刊本について]
- 安秉禧 (1976) 解題 呂氏郷約諺解. 『東洋学叢書 5』檀国大東洋学研究所. (安秉禧 (1992) 所収)
- 安秉禧 (1978) 解題 二倫行実図·警民編. 『東洋学叢書 6』檀国大東洋学研究所. (安秉禧 (1992) 所収)
- 安秉禧 (1979) 中世語의 한글資料에 대한 綜合的인 考察. 『奎章閣』 3: 109-147. (安秉禧 (1992) 所収) [中世語のハングル資料についての総合的な考察]
- 安秉禧 (1992) 『国語史 資料 研究』ソウル: 文学과知性社.
- 安秉禧 (2002) 신숙주의 생애와 학문. 『생국어생활』 12-3: 5-25. [申叔舟の生涯と学問]
- 安秉禧 (2007) 『崔世珍研究』国語学叢書 6. ソウル: 太学社.
- Bae, Younghwan (2014) 신창 맹씨 묘 출토 인간과 관련된 몇 가지 국어학적 문제. 어학연구 32: 143-166. 한국 중원 언어학회. 淸州. [新昌孟氏墓出土諺簡に関連したいくつかの国語学の問題]
- Bak, Haegjin (2015) 훈민정음의 길. 혜각존자 신미 평전. ソウル: 那碌. [訓民正音の道 慧覚尊者信眉評伝]
- 福井玲 (1985) 中期朝鮮語のアクセント体系について. 『東京大学言語学論集 '85』 61-72. 東京大学文学部言語学研究室.
- 福井玲 (1987) 杜詩諺解初刊本について 『東京大学言語学論集 '87』 29-50. 東京大学文学部言語学研究室.
- 福井玲 (2000) 十六世紀朝鮮語傍点資料についての基礎的研究. 『朝鮮文化研究』 7: 16-188. 東京大学大学院人文社会系研究科朝鮮文化研究室.
- 福井玲 (2013) 『韓国語音韻史の探究』東京: 三省堂.
- 早田輝洋 (1974) Accent in Korean: Synchronic and diachronic studies. 『言語研究』 66: 73-116. 日本言語学会. (早田 (1999) 第7節に日本語で再録)
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』東京: 大修館書店.
- 伊藤智ゆき (1999) 中期朝鮮語の漢字語アクセント体系. 『言語研究』 116: 97-143. 日本言語学会.
- 伊藤智ゆき (2007) 『朝鮮漢字音研究』東京: 汲古書院.
- 金完鎭 (1973) 『中世国語声調の研究』国語学叢書 4. ソウル: 塔出版社.
- 金英培 (1992) 선가귀감 언해본의 서지와 어학적 고찰. 『세종학연구』 7 3-29. 세종대왕기념

- 사업회. [禪家龜鑑諺解本の書誌と語学的考察]
- 河野六郎 (1951) 諺文古文献の声点に就いて. 『朝鮮学報』 1: 93-140. 朝鮮学会. (河野六郎 (1979a) 所収)
- 河野六郎 (1979a) 『河野六郎著作集 第1巻 朝鮮語学論文集』. 東京: 平凡社.
- 河野六郎 (1979b) 『河野六郎著作集 第2巻 中国音韻学論文集』. 東京: 平凡社.
- 河野六郎 (1989) ハンゲルとその起源. 『日本学士院紀要』 43-3: 101-122. (河野六郎 (1994) に再録)
- 河野六郎 (1994) 『文字論』. 東京: 三省堂.
- 李基文 (2002) 『新訂版 国語史概説』 ソウル: 太学社.
- Ramsey, S. Robert (1978) *Accent and morphology in Korean dialects*. Seoul: Tower Press.
- 世宗大王紀念事業会 (2010) 『訳注 上院寺重創勸善文・御牒, 靈驗略抄, 五大真言』. ソウル: 世宗大王紀念事業会.
- Uwano, Zendo (2012) Three types of accent kernels in Japanese. *Lingua* 122: 1415-1440.

執筆者連絡先: [受領日 2015年3月11日]
113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 最終原稿受理日 2015年8月24日]
東京大学大学院人文社会系研究科
韓国朝鮮文化研究室
e-mail: fkr@l.u-tokyo.ac.jp

Abstract

Some Fundamental Issues Concerning the Middle Korean Side-dots

REI FUKUI

Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo

When the Korean alphabet was invented in the 15th century, almost every character written in this new script was accompanied by one of the 'side-dots' which were used to represent the pitch of the syllable. This paper tries to answer the following fundamental and not yet fully resolved questions concerning side-dots: (1) the reason why side-dots were recorded, (2) why they used side-dots, instead of drawing small circles at the four corners of a character which was a more traditional way of representing tones, (3) why and how texts without side-dots notation increased towards the end of the 16th century, and finally (4) the linguistic background of the writers of Middle Korean texts, i.e., which dialect they spoke. Answering these questions leads to a better understanding of the historical change of the prosodic system of this language.